

Title	綜合日本史概説 卷下(栗田元次著, 中文館書店)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.2 (1928. 7) ,p.150(304)- 151(305)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280700-0150">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280700-0150</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

つて、これは『アツマ人といふ總名を以て呼ばれた有名無名の民衆詩人』が、『些の虚飾もなく、些の忌憚もなく衷情を三十一音に託し、日常の國語を以て之を詠出した』ものであつて、『其巧智を弄せざる所に當代の民情が反映し、其斧鑿を加へざる所に當代の語法が發露』し、『我々上代文化の研究者に取つては他に得がたい好資料である』。しかしこれらの歌は萬葉集中その語釋の最も困難なるものであつて、その正しき解釋を得るためにには、言語學についての知識を必要とする。すでに日本言語學の著ある松岡氏は、この點において誠にその人を得たるものといふべく、本書においても言語學上幾多の新見解を提示されて居る。例へばアツマの語原に關して、これはアツミといふ語の音便で、綿津見神の裔と稱するアツミ(阿曇)族といひ、このアツマ人の居住する國であるが故に、東國をアツマと稱するのであるとなし、またサキモリ(防人)の意味は、邊防の義から出たといふ從來の解釋を排して、サキモリはセキモリ(鬪守)の轉で、所在の關に配置された守備隊であるとなしてゐる。これはほんの一例にすぎない。かゝる新見解は隨所にみらるゝのであつて、各歌を解釋しつゝ、なほ古今集の東歌や風俗歌の或ものまで添加し、最後にこれらの歌にあらはれた民衆の生活について民族學的研究を示された。實に本書は歌の解釋からみても、民族學の研究から言つても、幾多の創見をみるところの、萬葉集研究の好著といふべく、著者がその豊富なる言語學、民族學の知識をもつて、更に萬葉集全體に關する研究の公にされんことを望んでやまない。(松本芳矢)

## 綜合日本史概說 卷下(栗田元次著)

史學に於て綜合の必要であり、且つ大切であることは言ふまでもない。個々の人物の研究、個々の事件の研究、各時代の研究の上に立ち、明快なる史觀を以て、その相互の心的物的因果關係を把握し、之を巧に描寫し、明晰に記述することこそ史學者のなすべき本務であり、又最も至難な事業である。史學の研究の盛になると共に、或る時代の研究、個々の人物、事件の研究は益々多く發表されるが、之を綜合するの良著は未だ多く見ないのである。栗田氏のすでに綜合日本史概說上卷を出し、又其の下卷を刊行された事は誠に喜ばしき次第である。

本書は江戸幕府の設立に筆を起し、幕府政治の武斷政治より文治政治への變遷、幕政の停滯及び破綻を述べ、一方に於ては其の間に國民文化の興隆及び文運の移動、國民經濟の發達等を記述してゐる。故に本書は江戸時代に限らるゝものであつて、獨立して江戸時代史とも見らる可きものである。附錄の國史の時代觀に於て、著者は一般社會的現象を包括する總體的普遍的特色を以て時代を區別し、古代は意志の時代實行の時代であり、上代は感情の時代藝術の時代であり、中世は信仰の時代宗教の時代であり、近世は理性の時代學問の時代であるとのてゐるのは、注意すべき一つの見方であると思ふ。又附錄として文献目錄を附し、明治元年以後の編著で單行本として刊行されたものを組織的に記載し、且つ圖版讀法をも添へた事は初學者の爲に非常に便利なものである。

實に本書は複雑なる社會現象及び其の變遷を巧に統一整頓した點に於て、又は意見の正鵠なる點に於て、その綜合的態度が明白に表明され、且つ多くの圖版を挿入し平易なる文體を以て記述した點に於て、一般讀書人に喜ばる可き事を示してゐる。兎に角綜合的研究の良著にこぼしい我國に於て、本書の刊行を見た事は喜ばしき事である。敢て一般人士の國史として又は參考書として推賞するものである。（今宮新）

### 紀州有田民俗誌（笠松彬雄編）

本書は爐邊叢書の一冊であつて、『こんどくるときあもてきておくれ、有田みかんの鉛なりを』といふ民謡によつて知られた所謂紀州蜜柑の本場である有田郡の東部の山村八幡村を中心とした民俗誌である。『土地の俗謡』は、村の無名詩人たちがその地の状態や人情や戀愛事件などをうたひこんだもので、誠に興味ふかいものであり、『年中行事』や『臨時行事』によつて、ほど一年間の村の農事や慣習を知ることができる。また『俗信』や『俚諺めいた言葉』や『謎々』などは、他の地方との類似を多數にみるやうであるが、村人の精神生活を知る上に重要であり、殊に『大和言葉』といふ諺の暗號がかくまで豊富に用ひられてきたことは、原始的な農村にはめづらしいことである。『子供言葉』と多くの『俗謡』とは、これまで素朴な村人の生活の反映である。本叢書も本書をもつてすでに二十三冊の多數に上つたが、今後もますます續刊されて、わが民族學の興隆に貢献されることを祈つてやまない。（松本芳夫）

### 長崎隨筆（大庭耀著）

表題が示す如く本書は純然たる隨筆集である。收むる所の十數篇、勿論一貫した統一はない。それは過去の長崎の物語を材料として、極めて敘情詩的な筆致をもつて描いた文學的所産である。即ち著者は卷末に「混びゆく古き長崎の異國情趣を回顧追憶して讀者と共におらんだの夢、もろこしの夢に遊ばう」と謂つており、従つて著者の想像は各所に加へられ、又た主觀も濃厚に盛られてある。然し著者が各篇に就き正確なる史實の詮索を怠らないことは、注意すべきである。本書の序文に於いて吳博士は、十數篇中「蘭館醫シーボルトと其扇」の一篇が自眉ならんと述べて居らるゝが、本篇は著者が餘りにシーボルト及び其扇に同情を寄せらるゝ爲に多少主觀に過ぎた感がある。されど其の他の諸篇例へば、「唐紅毛風の小唄」と題する支那人蘭人風の長崎獨特な流行唄のこと、或は「長崎の繪踏」と題する踏繪板やその行事など、さては「おろしや船渡來一件」の史實の叙述の如きは、過去の長崎文化の特有なる雰圍氣を躍如として味ははしむ。苟も長崎の過去を物語るものには、一本一草と雖も捉へ來つて、之に深い厚意と同情とを垂れたる、情熱に溢るゝ著者の態度に親まれる。挿むところの貴重なる資料寫眞十八葉。要するに長崎に生れ、長崎に住み長崎を愛し、よく長崎の史實に通じた人にして初めてなし得る種の獨自な著である。本書は郷土研究社發行同社第一叢書中の一。（有賀春雄）